令和３年度　第３回　伊賀市多文化共生推進プラン委員会　議事概要

日　時：令和４年６月28日(火)　午後２時～午後３時55分

場　所：ハイトピア伊賀４階多目的室

出席者：オチャンテ村井委員、西岡委員、福永委員、上出委員、重山委員、船見委員、竹井委員
（欠席：和田委員、井上委員、辻岡委員、尾登委員、峰委員、森永委員、グエン委員）

内　容：

１．あいさつ

〇委員長あいさつ

〇会議資料の確認

〇傍聴、会議録公開について

２．報告事項

多文化共生のまちづくりアンケート結果報告書

〇報告書の説明（事務局）

〈質　疑〉

委員長　伊賀市多文化共生のまちづくりアンケートの結果について、何か質問・コメントはないか。

事務局　ホームページに報告書とそれぞれの設問に対する回答数などはアップさせていただくのでご覧いただきたい。

３．議事

(1)重点課題に対する取組方向（専門部会案）

〇資料１の説明（事務局）

〈質　疑〉

委員長　事務局から説明があった。委員の皆様からご意見、質問などはないか。皆様が出したアイデアも取り込まれている。説明があったように、事前に送付された内容から事務局案として追加がある。「具体的な取組内容」のところで、こういった課が取り組んでいけるということである。

事務局　各課に照会し、主体的に取り組めるかを確認した。

委員長　「取組方向」の中で、例えば「日本語教育の機会づくり」では、多文化共生課、生涯学習課、地域連携部が関係各課として取り組むということである。分かりにくい点はないか。

事務局　課名のないところは行政に「〇」がないところである。

委員長　質問でなくコメントでも良いが、どうか。

委　員　確認だが、「〇」を付けるところが「市民」「地域」「企業・団体」「NPO等」「行政」とあるが、これは主体となる人、主に動く人のところに「〇」が付いているのか、参画してほしい人も含めて「〇」を打っているのか。

事務局　当然いろいろなところで市民なくしては進んでいかないとは思うが、主に主体的に取り組むところという視点で「○」を付けている。ここはどうかというところも含めて見ていただき、ご意見をいただけたらと思う。

委員長　例えば、「子どもの学習支援」の中で「市民」「地域」に「○」が付いていて、「企業・団体」「NPO 等」に「○」を付いていないが、NPO 等も関係していると思うがどうか。

事務局　加わっていただければと思う。

委員長　そういうコメントでもいただければと思う。

事務局　「子どもの学習支援」の「長期休暇期間中における学習支援教室の開催」には、当然 NPO や企業に関わっていただきたい。ここで確認を取らせていただき、主体的に取り組んでいただけるということで、印を付けたい。

委員長　他に気付いた点などはないか。

委　員　「カ」の「交流機会の創出」は全部に「○」が付いている。交流する機会なので「誰でも」という言い方をする。「交流」というキーワードが使われているということであれば、一番上の「日本語教育の機会づくり」の「具体的な取組内容」は、「地域における交流機会を生かした」とあり、交流するのは市民なので、「市民」に「○」を付けておくほうがいいのではないか。

事務局　「日本語教育の機会づくり」の「市民」のところに「○」を追加する。

委員長　「(4)国籍を越えた交流による地域づくりに向けて」の「『やさしい日本語』の普及」のところだが、「行政」と「企業」二つに分けていくということか。

事務局　そうである。行政職員が意識を持っていない現実があるので、行政職員向けにも徹底的に取り組まなければならないかと、柱立てしている。

委員長　これは関わっているのは行政のみなのか。

事務局　そうである。行政職員向けなので、上の部分については行政の取組として扱っている。

委　員　「有効なツールの活用による多言語情報の発信」の中で、活用の部分、「SNS 等の活用」や「外国語版情報誌の PR と活用」、「PR」の部分はどうかと思うが「活用」となると「市民」も関係すると思う。「○」を付けてはどうか。

事務局　「活用」という部分には、「外国語版情報誌の PR と活用」という言葉が入ってくるので、こちらも「市民」のほうに「○」を付けたい。

委員長　「子どもの学習支援」で「長期休暇期間中における学習支援教室の開催」とあるが、他県の取組で、特に外国人労働者の多い企業では子どもたちへの日本語指導などの教室を開いているところもあるが、そういうものはどうか。そこで働いている外国人への日本語指導もだが、子どもたちへの支援もできるのではないか。

事務局　専門部会でも、学習支援や日本語教室で企業に場所を提供していただくとか、何らかの形で協力していただけないかという話があったと思う。しかし、お願

いして協力してもらうのと主体的にというのは違う。

委員長　主体的になるような言葉というのはなかったか。

事務局　その部会の中ではなかった。

事務局　ここまででお聞きしたのは、「(1)外国人住民が活躍する地域づくりに向けて」の「日本語教育の機会づくり」の「市民」のところに「○」が入るということと、「子どもの学習支援」の「長期休暇期間中における学習支援教室の開催」は「企業団体」と「NPO 等」のところに「○」を、「有効なツールの活用による多言語情報の発信」の「SNS の活用」には「市民」に「○」、その下の「外国語版情報誌の PR と活用」は「市民」に「○」、以上が追加になるということで良いか。

委員長　「暮らし・教育・子育てグループ」の確認をする。「(2)だれもが安全に安心して暮らせる地域づくりに向けて」と「(3)教育・子育てしやすい地域づくりに向けて」についてはいかがか。

事務局　福祉的な分野であるので、行政や社協、団体からのアプローチをし、待っているのではなく、前へ出て行くべきとの話があったので、「市民」の「○」は少ないかもしれないが、そういった観点から整理した。

委　員　「地域参加を通じた日頃からの関係づくり」の「取組方向」の部分で、「具体的な取組内容」の「日常的な交流から防災訓練等に参加をつなげるしくみづくり」には、私どもが受託した部分も取組が必要かと思われるので、「企業・団体」への「○」が抜けている。

事務局　ありがとうございます。

委員長　他にいかがか。いつまでに事務局に伝えれば良いか。

事務局　「○」の部分については、今週中ぐらいに言っていただければと思う。

委員長　来られていない委員の意見もあるだろう。

事務局　もし大きく変わるようであれば、委員長、副委員長にご相談させていただく形でも良いか。

委員長　分かった。今週末までに追加があれば、事務局に報告していただければと思う。では、「重点課題に対する取組方向（専門部会案)」について、承認とさせていただく。

(2)伊賀市多文化共生推進プラン 構成とフォーム（案）について

(3)伊賀市多文化共生推進プラン　施策の体系（案）について

○資料２、資料３の説明（事務局）

〈質　疑〉

委員長　事務局から説明をいただいた。ご意見、質問などはあるか。

委　員　表記上のことだが、「オール伊賀市でめざす将来の姿」で「～ができる」と書くときに漢字を使わないほうが良い。内閣府が出しているものか何かで、公文書では「できる」はひらがなと言っている。

事務局　修正させていただく。

委員長　他にどうか。言葉の意味合いなどでも良いが。

委　員　　１ページ目の「オール伊賀市による取組の方向」で、１-A-(1)「日本語教室の開設」は分かりやすくて良いが、「日本語教室」と書くと、場所を開いて皆で集まって対面で教えているイメージになる。しかし、文化庁は「日本語学習支援活動」と言っており、「日本語ボランティア」という言葉も使わなくなってきている。「日本語学習機会の拡充」であれば、場所をつくらなくてもオンラインで学べるシステムを構築することも含めて日本語を学びたいというニーズに応えられると思うので、「日本語学習機会の拡充」のほうが広く意味が取れると思う。

委員長　　事務局どうか。教室だと「場所」というイメージが。

委　員　　「教室」と書いてしまうとどうしても一般的なイメージになってしまう。これは、日本語を学ぶチャンスを増やしたいという意味であろう。

事務局　　資料１の項目をそのまま持ってきているので、そういったところの表現もご指摘いただければ、まだ変えられる。

委員長　　「☆」マークが付いているのは専門部会で検討した項目で、重点として取り組んでいく内容になっている。

委　員　　先ほどの日本語教室の話を聞いて思ったのだが、日本語教室は少し堅いし、外国の方と話をすると、そういう場所へ行く時間がないと言う。行っても先生が喋っているだけで意味が分からないので、辞める人もたくさんいると言う。これからもっと新しいやり方、例えばインスタグラムなどを使って教えようとか、オンラインで夜遅い時間でもアクセスできるものをつくるとか、そういう意味も含めて「日本語教室」よりも「学べる機会を増やす」ということが大事だと思う。

事務局　　アンケート結果を見ると、「時間がなく、勉強したいができないのでインターネット環境などで見られれば」という意見は確かにたくさん聞こえてきた。仰る通り「機会の拡充」という書き方のほうが広い意味で学習の機会があると思えるので、そうさせていただきたい。

委員長　　「日本語教室」を「日本語を学習する機会」に変えると思うが、さらに細かく説明していくのか。

事務局　　資料３の６ページになるが、②の「主な事業」の「日本語教室の拡充」を「日本語学習の機会の拡充」に置き換える。いろいろなところで出てくる「教室」という言葉を変えていく。

委員長　　広く捉えて考えていただければと思う。

事務局　　表現を変えさせていただこうと思う。

委　員　　２ページの「Section２　だれもが安全に安心して暮らせる地域づくり」の「めざす将来の姿」の１つめ、災害時や緊急時における支援体制の確立などの話があったが、「日頃から顔の見える関係性を築き、災害時などに誰もが受け入れられ、支援する側でも活躍する場があり」というのは、受け手側というか助けられるだけではなく、災害時でも活躍してという意味だったと思う。例えば、「災害時などに誰もが受け入れられ」というところを「災害時などにおいても」としてはどうか。この「災害時などに誰もが受け入れられ」という意味が分からなかったので、このように直してはどうか。

委員長　　ありがとうございます。いかがか。

事務局　　分かりやすく伝える文章にならないといけないので、ご意見いただいたものを反映したいと思う。

委員長　　分かりにくいといった内容でも良いが、どうか。

委　員　　「外国人住民の高齢化への対応」とあるが、この前自動車学校に行ったときに、従業員から「来週、ブラジル人の方が高齢者講習に来ますよ」と言われた。今まではそこまではなく、おじいちゃんおばあちゃんになる前にブラジルに帰るという人たちもたくさんいたのだが、最近は日本人と暮らしたいという方も増えてきた。子どもたちのことも考えなければいけないが、高齢者のことも一緒に考えないといけない。それを考えることで、この会議の意味があると思う。

委　員　　どの世代においても大事である。

委　員　　良い伊賀市を作るということであれば、全員である。子どもたちだけではなく、大人でも高齢者でも考えないといけない。

委員長　　「☆」マークになっているので、とても重要なものとなっていく。

事務局　　専門部会でもかなりご意見があり、行政もまだ高齢のことについて気付いていなかったところもあった。専門部会でご意見をいただき、取り組んでいかなければならないとすごく意識したので、この計画には是非とも載せなければいけないと伝えている。

委員長　　３ページの「教育・子育てしやすい地域づくり」の中で、「子育て情報の充実」とか「子どもの居場所づくり」とかは重視される点として書いてあるが、「進学指導の充実」は 3-C となっている。C というのはどういう観点で言っているのか。

事務局　　これは現在も実施していて、じっくりと長く取り組んでいくものである。やらないということでは決してない。たちまちしなければならないものとして専門部会から抽出されたものが A になっている。プランに重点的に載せていくということでランク付けがある。

委員長　　長期的に見て進めていくということか。

事務局　　取り組んでいく。早急にというのは、プランの前期 4 年間で一旦やっていこうというものである。

委員長　　他にどうか。

委　員　　先ほど、「日本語教室」というのはどうかという話があり、意見としてインスタグラムとかオンライン、オンラインは時間が制限されるので、配信というものがあると良いと思ったのだが、「教室」と「学習」を変えるだけではなく、「具体的な取組」の内容にその言葉が見当たらないと思う。例えば、「地域を拡大します」「質を拡大します」という「質」の中に含まれていれば良いが、その辺りが見えにくくなるのではないか。せっかくそういう要望があるのであれば、そういう言葉を使ったほうが良いのではないか。

事務局　　記述の方法を工夫したい。

委　員　　少し変えてもらったほうが分かりやすくなると思う。もう一つ、「やさしい日本

語」の話があったが、公文書のルールはあると思うが、例えば「やさしい日本語」のセクションのところだけでも「やさしい日本語」を使ったら、気を引くのではないか。

委員長　最終的に市民に見てもらうときには、この文章も「やさしい日本語」に書き換えることはできるか。翻訳はするか。

事務局　翻訳はする。できるだけ本冊も「やさしい日本語」で、フリガナを入れるなど工夫はしないといけないとは思っている。ボリュームがどれぐらいになるかで、申し訳ないが、そのセクションだけということになるかもしれない。

委　員　「やさしい日本語」と言っているところぐらいは「やさしい日本語」を使えば、面白いのではないか。

事務局　「やさしい日本語」はどんなものかを見せていくのも一つの見せ方でもあるので、どこかに入れられるように検討したい。それが PR にもなっていくと思う。

委　員　「このページだけ『やさしい日本語』で書いています」という見出しを付けておく。一般の人が見たときに、前のページまでよりもこちらのほうが良い、という反応がほしい。

事務局　概要が分かるような A3 の見開きのものは作成しようと考えている。工夫していきたいと思う。

委員長　概要をつくって、せめてその 1 枚で「やさしい日本語」という意識はしていると。

事務局　概要版で、どこかで見せられるようにする。

委　員　「やさしい日本語」の話になったので、ここで言って良いことか分からないが、翻訳も「やさしい〇〇語」のほうが良いのではないか。私はいろいろな人から、翻訳された書類について「このポルトガル語の意味が分からない」と言われる。私は誰が読むのかを考えて翻訳をするので、例えば、単純に皆が見るものであれば堅い表現はなくて良い。企業へ出すものなど、堅いところは堅いやり方で良いが、皆に読んでほしい書類であれば、やさしいほうが良い。自動車学校の別の通訳の翻訳はとても難しいポルトガル語だった。彼は「これが正しい」と言ったが、私は「ここは自動車学校で、いろいろな人が来る。学習力のある人たちも来るが、あまりポルトガル語が分からない人も来るし、学んでほしいなら分かりやすく教えないと学べない」と言った。こういうものも伊賀市民全員に読んでほしいならば、もっと「やさしいポルトガル語」とかにしたほうが良いと思う。ポルトガル語ガイドがあるのだが「意味が分からないから、通訳料を払うので全部やってくれないか」と言われる。せっかくあるのにもったいない。何年か前からずっと思っていたことなのだが、考えて変えないといけないと思う。多分、日本人は見ても分からないので、あえて私が伝えようと思った。

委員長　日本生まれのブラジル人もたくさんおり、日本でしか使わないような日常的なポルトガル語しか使っていないということはある。分かりやすい文章はやさしい文章にはなると思うので、そこだけは意識して翻訳していけば良いのではないか。

委員長　他にどうか。無いようであれば、議事を終了とさせていただくが、事務局にお戻ししてもよいか。

事務局　ここに書かれていないが、これが実現していくと新たな価値が、どのような伊賀市が見えてくるかというところを少し書き込んでいこうと思っている。

事務局　資料３の４ページ、「『新たな価値の創造』に向けて」というところで、何も記載していないが、自由意見としていただいたものを反映できればと思うので、ご意見をいただければと思う。

委員長　４ページの Section 5 である。「新たな価値の創造」というのは、これから伊賀市として何か新たなものをということか。

事務局　多文化共生が進むことで何かが生まれるという。

委　員　伊賀市から多文化共生というキーワードでイノベーションが起きるというようなイメージか。社会的な事業や新しい産業、新しいライフステージが作れるような集いの場が生まれたら、というイメージか。

事務局　そうである。国籍や立場を越えて融合出来るところなど。いろいろな意見を聞くことで、発想が増えていったり、柔軟性が広がって協働できるとかいったことが生まれてくるのではないかというイメージを持っている。人口減少をくい止める存在でしかないような言われ方になっている場合があるが、そうではない。一緒に住んで生活することで、伊賀市の生活の質が上がっていくという、その質の部分がどのようなイメージかということかと思う。

委　員　たくさんあるが言語化しにくい。アイデア出しのようなもので良ければたくさん言いたいことがある。最近読んだ本で「関係人口づくり」と書いてあり、ヒントだと思ったのは「この指とまれ型プロジェクト」といったもので、高知県の山奥の廃校を利用した NPO の建物があって、全国から「学び」をキーワードに夏になるとたくさんの人がやってくるという。例えば、伊賀市に来ると「国境、背景、宗教など何も関係なく、こういうことについて学びたい」とか、「何かイベントをしたい」と言ったときに、例えば、行政側から、学校の跡地とか公の建物の再利用とか、ローコストでそういう場を演出できるという後押しがあって、誰でもそこに参加できて、何か新しいことを学んで、新しいグループが距離や地域を越えて集える拠点のようなインキュベーションセンターである。そういう多文化共生のインキュベーションを起こすような拠点づくりは、ちょうど日本の真ん中であり、大阪、名古屋、京都の中間地点である伊賀市のロケーション的にも面白いと思っている。色々なところで「伊賀市出身です」と言うと「忍者ですね」というイメージしかないが、「いや、忍者より外国人が多い」と言うとウケる。「そんなイメージ無い」と。そういうことはもっと PR しても良い。例えば、これだけ外国人が多く、外国籍の子どもも多くて、日本語を学びたい人も潜在的なニーズとしてあるのであれば、新しい地域日本語教育のモデルケースにはできないか。私はよく日本語教育を目指す人に言うのだが、大阪や神戸には日本語教師はたくさんいてライバルが多いが、伊賀へ移住したら仕事がある、と。伊賀は移住に対してものすごく力を入れている。移住コンシェルジュという職種もある。移住×多文化共生というコラボは面白いと思う。絶対思いつかないものをかけ算しないとイノベーションにならないと思っていて、そうすると、外国人というキーワード

で移住したい人は逆にいないのかと。外国人の動向を見ると、伊賀市に住んだ理由は「親戚、家族がいたから」が2番目に多いが、「他の地域だったら、ちょっと私は住めなかったけれど、伊賀に来たら仕事もあるし、学校のことも割とちゃんとやってくれる」というフィリピンの人がいたり、実際こっちに来て小学校へ行かせたら手厚かった、という人もいる。そうすると、リアルに集まらなくても、伊賀で手を挙げた外国人の人が全国に呼びかけて、オンラインを利用しながら、そこに集いの場があり、そこが起点となって何か新しいムーブメントを起こせるような体制づくりが面白いのではないか。そこにいろいろなことをかけ算して可能性を探るような、アイデア出しができる場があると、活気づきそうな気もしている。なぜ思いついたかというと、日曜日に大阪の生野区のイベントに行ってきたのだが、生野区では、多文化共生の画期的なことを始めた。「IKUNO 多文化ふらっと」という NPO に小学校の跡地を 20 年間貸して、生野コーライブズパークというものをつくろうとしている。「繋ぐ」「学ぶ」「食べる」「働く」「集う」「楽しむ」「伝える」「守る」という8つの行動・アクションの下にいろいろなことをする。例えば、「地域の高校とコラボしましょう」とか、シンポジウム、セミナーとか。コリアンタウンが近くにあるので食文化の発信地になるとか。元々そこには学校があって、多文化共生の拠点に、学校のグラウンドも含めて全部リノベーションしてしまおう、というものである。そこまで大々的にやらなくても、もっと小さいサイズでそれができるのではないかと思う。大きい箱モノがなくても、今はパソコンだけでもそういう空間は作れる。伊賀に生まれ育った外国につながる子どもたちが、もちろん進学して普通に進路を開拓していくのも良いが、伊賀にいて自分でビジネスを始められるとか、外国の人も日本の若者も含めて、新規ビジネスをするに当たってどういうことをまず学べば良いのか、ということを分かりやすく教える場が年に1、2回あるとか。途中で高校をドロップアウトしても、アルバイトに流れるのではなく、もう少し学び直して自分で起業してみようというものがあれば良い。また、15、16、17 で来た、オーバーエイジの子どもたちは中学校もなかなか受け入れてくれないが、平日学ぶ場も無いし、オンラインで学ぶシステムも無く、どこに誰がいてということも分からないので、少しでもそういうことに対してアプローチできるような手立てを打って、今までセーフティネットにかからなかったところにアプローチできるようなものを含めて書いていったほうが良い。一言で言語化できないが、他の地域で先進的にしていることを伊賀市の現状に合うように言語化すると、Section 5 はあくまでもアイデアで、これからのプランの4年間の中で、もし実現できれば面白いし、それに反応してくれる市民が一人でも二人でも出てきたら嬉しい、というようなところならば、多分アイデアは出るのではないかと思う。

委員長　話を聞きながら思ったのだが、せっかく多文化共生センターがあるが、どこまで利用されているのか。生かされているのか。スペースが狭く、どこまで活用できるか微妙だが、もう少し広ければもっといろいろな活動ができると感じる。他のところだと、カフェができるぐらいのスペースで、いろいろな情報などを学べる

スペースもある。そういう部屋は伊賀にはなかなか無い。そういう多文化共生をキーワードにした観光など、多文化を体験したい学生・大学などもたくさんいるのではないか。

委　員　浜松は企業でやっている。多文化共生にツアーで来ませんかと、半日コース、一日コース、一泊二日コースで作っている。連れていく企業、昼ごはんを食べる場所などとコラボしてあり、話を聞きたいと言ったらすぐ若者を呼んで喋ってもらったりというものが商品化できている。伊賀だってできる話である。関西や名古屋の多文化共生を学んでいる大学に営業に行くとか、行かなくても今は SNS に上げれば引っかかってくれる人もいる。敷居がもっと低い、フラットな集う場。多文化共生×古民家再生である。

事務局　何か常設の拠点があってということか。

委　員　子どもたちが駄菓子屋に行く感覚で、放課後そこで皆でワイワイやっているというようなイメージが良い。

委員長　「居場所づくり」にも関連するかもしれない。

委　員　街中も含め、いろいろな地域で空き家が出てきているので、少しお金はかかるが、社会ビジネスとしては良いのではないか。

事務局　伊賀市には多文化共生課ができたということと、多文化共生センターが新たにハイトピアに位置づけられたということで、これから進めなければならないというところである。多文化共生センターもこれからどのように充実させていくかが課題であり、4 月からプランをしっかり立てて、これから先に進んでいくということでもあるので、伊賀市らしく、伊賀市がどのように取り組んでいくか、建物があるのか、SNS を活用するのか、やり方はさまざまだが、伊賀市のやり方で進めるということだと思うので、それが「新たな価値の創造に向けて」に書き込めると思う。これからご意見を聞く機会も設けたいし、今後ともご意見をいただいた上で進めたい。「新たな価値の創造に向けて」ということで、何か少し言語化していけたらと思っている。

委　員　ターゲットはどこを見ているか。2026 年か 30 年か。

事務局　2026 年である。一旦 4 年のターゲットになる。

委　員　先ほど言われたのはリアルの話だが、4 年後はリアルではなくバーチャルがもっと進んでいるのではないか。東京とか大阪はもうまちがメタになっている。リアルだと限られてしまうが、メタならば、自分がそこに行けば良い。それで、伊賀市が、こんなところがあるとそこで見られたら、オール伊賀市ではないかと思う。メタの空間で、日本人、外国人、集まりたい人で集まったらいろいろなコミュニケーションができる。子ども、お年寄りなど、自分が行けなくても、そこへ行ったら人に会えるというのが、4 年後ぐらいであればもう少し進んでいるのではないか。

事務局　多分、コロナの先にはそういう視点が広がっていく。お金的にもそのほうが安価で、進んでいくツールだと思う。

委　員　地域活動の担い手や日本の文化を残していくという中で、その継承も課題になっ

ていると思う。男女共同参画も進み、今までだと、例えば女性は祭りには関われない、関わってはダメだとか、ややもすると偏見的な、精神的な部分があった。日本人でないとダメとか、そういう思いが古い祭り事なら残っているが、多文化共生の取り組みが進むことでそこが払拭されて、誰でもが当たり前に違いや文化を認め合いながら関わるようになれると良い。空き家の話もあったが、空き家がすごく多く、日本建築のように改修して売り出していて、それも一つかと思うが、外国籍の方の文化や生活様式に合わせた改修とか、国際村ではないが、どこどこの地域のスタイルはこういうものであるとか、例えば、この部屋はブラジル形式、こちらは日本形式とか、そういうもので観光にもつながったら良いと思う。バーチャルでネットでも見てもらえるようにとか、従来の伊賀市らしさを残していくということだが、せっかく多文化の、多国籍の方もいる強みを持った市なので、そういうものを広げたいと思う。自分たちから意識を変えないとダメだと思う。

委員長　私は、大学生を伊賀に連れてきて、ブラジル人のお宅にホームステイして、日本にいながら外国の文化、外国人の人が来たら日本の文化を、直に交流できるような伊賀市であったら、それは観光として充分生かせるものだと思う。
Section 5 のところは、いつまでに出せば良いか。

事務局　これもできれば今週中に。もしこの言葉を使ってほしいとご紹介いただければ、そこから私たちも調べていく。イメージでも構わない。

委員長　もちろん、伊賀と言えば忍者というのはあるが、多文化共生の外国人が多いまちのメリットを挙げていただければと思う。それで伊賀市に来る人も結構いると思う。ブラジル人のレストランとか、タイのレストランとか多国籍料理とか、そういうものも一つ大きなアピールにはなると思う。この「新たな価値の創造」についてのご意見も、どんどん聞かせていただければと思う。

事務局　船見委員が紹介された生野区の資料を共有させていただこうと思い、コピーしているのでしばらくお待ちいただきたい。

委員長　他の県でこういった取組が行われているなどの情報があれば、出していただければと思う。外国の子どもたち向けの進学校は生野区だったか。

委　員　府立わかば高校である。元々しんどい思いを持った子たちも行っている高校だったので、外国籍の子も入って来られるようになり、それをマイナスと捉えるのではなく。

委員長　日本語の学習を単位として入れている。

委　員　それは門真なみはやだが、大阪府の学校は全部そうしている。これは別に今ここで言うべきことではないが、高等学校とのコラボは絶対要ると思う。高校へほぼ100%進学していて、若い世代が進路選択するときに、地元に残っても良いとか、大学は遠くへ行くがまた親と一緒に同居したい、と言ったときに、いろいろな価値観があっても良い。高等学校は来年から日本語指導を本格的にやると文科省が言っていて、特別の教育課程を高校でやるということについて三重県は何か具体的にやろうとしているのか調べてもらったら、まだ具体的には何もないということらしい。伊賀市内の、外国籍の子どもがたくさん行っているあけぼのや白鳳高

等学校は、今まで現場の先生が頑張ってきた実績で何とかなってきたが、もう少し体系化して日本語ができない子でも受け入れようとしているので、定時性も含めてもう少し整理をすべき。これは県レベルで言わなければいけないことだが、高等学校の先生も日本語教育をするためにこういうものが必要だということも、伊賀市は先行する形でこれだけ進学実績があるなら、逆にそれを売りにしても良い。伊賀で先行してきて、なぜそれが成功したかをどんどん発表してもらう。

委員長　大学に進学している若者は他の県に就職しているが、やはり高卒の場合はほとんど伊賀市に残ることが多いので、もっと活躍ができるようにならないか。就職はするが、すぐにしんどくて辞めたり、それで結局非正規雇用になってしまうとか、せっかく伊賀市の企業に入るなら、もう少し育て方がないかと思う。新たな価値として、伊賀で育ち、外国の文化も知っている子どもは、適応力はある子どもだと思う。

委　員　多文化共生センターの役割としては、どちらかと言うと今までは対処療法的だった。もう少し言うと、普段からもっと健全でありたいというほうが正しい。子どもたちが進路選択するにあたって、18 歳で新しい価値観を吹き込んでも遅いので、もっと早い段階からいろいろな機会をとらえて、アイデアとしては、キャリアプラン応援センターのようなものが良いと思う。伊賀で育つ子どもたち全般に言えることかもしれないが、別に大学へ行くことが悪いことではないが、決して大学や専門学校へ行かなくても、こういう生き方があるとか。外国籍の方の家はすごく視野が狭い方もいるので、こういう職業があるとか、こういう職業はなり手が少なくて困っているとか。先ほど、日本文化を継承するという話が出たが、大体、日本全国でなり手がないところに飛び込んできている有望な継ぎ手は外国人ということがある。よくテレビでもフィーチャリングされるが、逆に言うとそれぐらい日本の若者がそういうところにいないということである。日本の子どもたちが価値に気付いてない可能性もある。真面目に勉強して、大学は行っておかなければいけないというような。とはいえ、大学を出て就職しても、３分の１はすぐに辞めてしまう。それならば、本当に価値のあるものにキャリアを頑張ったほうが良い。

委員長　進路相談ができるキャリアセンターという話が出たが、これから必要になっていくのではないかと思う。こうなりたい、例えば、看護師になりたい、と言われて、高校はどこに進学するのかなどが分かっていないので、そういう方法など、ここへ行ったら話ができるとなると良い。

（委員提供資料の配付）

委員長　最近、大阪でもワールドクラスとかという名前に変更されたりするような場所もあるが、やはり多国籍の子どもたちが増えているので、ワールドクラスという表現に変えていることが多い。やはりこういう子どもたちが活躍する機会もなかなか伊賀市ではないと思う。

委　員　登壇者の方が、東京よりも遙かに進んでおり、多分、日本で最先端がここだと言っていた。昔はイメージが悪かったが、久しぶりに生野に来て、一日でイメージ

が変わったと言っていた。私も鶴橋駅の東口から降りて会場に行ったのだが、ものすごい人が歩いている。生野のコリアンタウンは年間200万人も来るそうである。そこに、すごいマーケット規模がある。資料の見開きのビジョンのところに、「60か国以上の外国につながる方が暮らすまちです」と書いてあって、やはりアジアの方も増えているし、日本語学校などもできている。ただ、中には生活が厳しい人もいるので、いろいろな意味でサポートは必要だという話だった。イベント自体は配ったものだけではなく、元々は「生野の日本語指導が必要な子ども白書」ができたので、その完成報告会だった。印象的だったのが、子どもを中心とした多文化共生をやらなければダメだ、というようなことを言っていたことで、世代的に中心は子どもだと。子どもが中心にいて、まわりの大人が多文化を考えるくらいの勢いでやらないといけない、という話になり、まさにそうだと思いながら、良い距離感で、関わりたいと思ったくらい感銘を受けた。ヒントがたくさん載っていると思う。

事務局　お話しいただいたことやいただいた資料で、このキーワードが良かったなどでも良いので、今週中に、メールかお電話でいただけたらと思う。

委員長　資料をいただいたので、参考にしながら、こういう取り組みができるのではないかというものがあれば、今週中に事務局へ連絡していただければと思う。
ご発言されていない委員からコメントがあればお願いしたい。

委　員　「子どもの居場所づくり」の中で、「家庭に問題がある」という考えでずっと見ていた。若者の居場所づくりだけを考えたら、やはり情緒であるとか文化という部分が重要になってくると思う。少年団などへ子どもたちが入っていけることも重要ではないかと思うので、ここに生涯学習課があるので、スポーツ振興課を加えてはどうか。

事務局　資料1の「暮らし・教育・子育てグループ」の一番下「子ども・若者の居場所づくり」の担当課のところか。

委　員　最初の「家庭に問題のある子ども」というイメージがあったので、これでも良いかと思っていたが、やはり子どもの社会参加というところから見ると、スポーツ少年団や子ども会という文化的なところへ自然に入っていけるような形が良いのではないか。そうすると、生活支援課、こども未来課、生涯学習課、その次にスポーツ振興課も置いておいたほうが良いのではないかと思う。

事務局　スポーツ振興課は専門部会にも入っておらず、確認しないといけない。ご意見をスポーツ振興課に確認し、一緒に取組できるようであれば記載の追加をさせていただきたい。

委　員　私は「やさしい日本語」というものがすごく心に入ってきた。ここで言っている「やさしい日本語」は「簡単な日本語」という意味ではない。通じる、エッセンスを本当に伝える。だから、普通の市民の方が見たときに、「やさしい日本語」には意味がある、普通の文章の中のやさしいではなく、「やさしい日本語」というものを私たちはこれから大事にしていくのだということが分かるように『　』（二重カギ括弧）が良いのではないか。ここの章だけは本当に「やさしい日本語」で

書こうということにもつながっていると思う。その気持ちを皆に持ってもらえば、住みやすくなる。4ページの「やさしい日本語」の普及はカギ括弧に入れてある。だからそういう思いを持ってくれているということが分かった。民生委員との代表の会議で、「日頃の活動の中ですごくそういうことを意識しながらやっています」と言ってくれた、非常に熱心な民生委員の方が、「簡単な日本語」と言われたが、その人の意味しているのは「やさしい日本語」なので、「簡単な日本語」という意味ではないと思う。その言葉を大事に、キャッチフレーズのように押し出してはどうかと思う。

委員長　分からない人が多いと思うので、こういう意味合いで使っていると示すのも大事だと思う。

委　員　子どもが大事だという話を聞いて、本当にそうだなと思う。いただいた資料のように、皆さんの笑顔を大事にして、この子たちに見習って大人も取り組んでいけるような、子どもたちのフラットな考え方を大人が逆に学んでいく機会を多く作っていけたら良いと思う。

委員長　ありがとうございます。では事務局にお返しする。

4．その他

〇今後のスケジュール